

8屋

新しい情夫を持つて、暮れ向きがよくなる
 たらうと云つて、全然ていなし子の孫を云は
 れるし娘もあして、^{鮎子}見が知らずの男を父
 と呼ばせることが、自分を殺すすりも甚しく
 思へて、そんな独り言を云つたのだうた。
 「お婆や」と石臼^{いってゐる}碾^お子供がいまなり呼ん
 だ。「お婆、お婆やんはほんとは横珠のをばや
 ん子鮎子さんをやる気かいの。」
 「うう？」

「お婆やんがこれまでいつくしんで来たもの

を^お今更になつて横珠のをばやんを取られる
 なんて、ほんまよ、惜しかあぬえ^{サエ}

「さう村の衆は云つてるよ。」

「お婆や、なよ云つてるだ！」

老婆は皆中の子供を揺すぶり揺すぶり、暗
 い部屋の中をかを歩いた。

蠅が、老婆と皆中の子供のまはりを、絶え
 ず群立つてゐる。

馬がひんんと嘶いた。

「畜生！ いま寐あ、まくらッたばかりのく

武川重太郎